

# 心（小腸）の病証と治療

神奈川県・平馬医院 平馬直樹

## 1. 心の生理機能

心の生理機能を表1に示す。

表1 心の生理機能

- 1) 血脈を主る
- 2) 神志を主る

心は人の生命活動を統括する重要な臓と考えられ、一国の君主になぞらえて「君主の官」とも称される。

1)は「血脈を主る」。『黄帝内経 素問』痿論に「心主身之血脈。」とあるように、全身への血液の運行は、心臓の拍動、すなわち心気の推动作用に依拠している。また、全身にはりめぐらせている脈の機能は、心が統率している。全身の臓腑組織に血を送り出して、血脈中をよどみなく循環させる重要な働きをしている。また、「諸血は皆心に帰入する」という認識もあり、全身をめぐった血は再び心に帰ってくると考えられた。血脈を主る機能が失調すると全身あるいは局所の血虚や血瘀を生じやすい。

脈診は心の状態だけでなく、全身の気血の運行や、臓腑の状態を反映するものとして、全身状態の診断に用いられているが、脈の強弱・リズム・滑らかか否かは直接心の血脈を主る機能を示すので、心の状態を把握するのに重要である。

2)の「神志を主る」の「神」は意識と精神思惟を主る物質。『黄帝内経 素問』靈蘭秘典論に「心者君主之官，神明出焉。」とあるように、人の精神・意識・思惟活動は心が統括している。この機能はまた、「心主神明」「心蔵神」とも表現される。

『黄帝内経 靈枢』邪客篇にも「心者五臓六腑之大主也，精神之所舎也。」と靈蘭秘典論と類似した内容の表現が見られる。神は人の精神・意識・思惟活動を主宰する物質とされる。中医学では現代医学が解明した大脳の機能の多くが心の機能に割り当てられている。心が主る精神活動はことに意識と思慮で、感情や情緒は肝と関係が深い。

## 2. 心に属する組織・器官、液、情志

表2に、心に属する組織・器官、液、情志を示す。五行の火に配当される項目である。

表2 心に属する組織・器官、液、情志

- 1) 腑にあつては小腸と表裏をなす
- 2) 脈に合し、その華は面にある
- 3) 舌に開竅する。味覚・言語を主る
- 4) 液にあつては汗となす
- 5) 志にあつては喜となす

心と表裏をなす腑は小腸である。その働きは次項に示す。

全身の血脈は心に属する。これは、前述の心が血脈を統率していることを受けている。心気が充実して血脈が順調に循環していれば、健康的な顔色が見られる。うまくめぐっていなければ顔色が白っぽく(血の気がないなどと表現される)、くすんだりする。顔色を見れば心の状態が外から観察できるので、「その華は面にある」とされる。

感覚器官では舌に開竅するとされる。味覚・言語を主る。舌診では舌質の色彩・光沢は心の血脈を主る機能を反映する。

体液では汗が心と関係する。汗の生成や発汗には、ほかの臓腑も関わるが、心気不足になると自汗(少し動くと発汗する)が生ずるなど、汗が心の状態を反映することがある。

心は人の精神活動を統括しているが、感情では喜ぶことと関連が深いとされる。喜ぶことは心の血脈を主る機能や神志を主る機能を活発にさせるが、喜びすぎることでも心気が暴発して、興奮したり脈が促迫したり病的反応を引き起こすことがある。

## 3. 小腸の生理機能

小腸の生理機能は2つが挙げられる。第1は「受盛と化物を主る」。『黄帝内経素問』靈蘭秘典論に「小腸者受盛之官，化物出焉。」とあり、胃から降りてきた飲食物(水穀)を受け取り、さらに消化を進めることである。

第2の機能は「清濁を泌別する」。飲食物の精微(清)と残渣(濁)とを分別し、清は吸収し濁は大腸へ分泌する。また、無用な水分も膀胱へ分泌する。水分代謝の失調を小腸の病証、さらに表裏をなす心の病証として弁証することがある(後述の導赤散の項参照)。

## 4. 心の症候

心病によく見られる症候は、心主血脈・心主神志の機能の失調を反映するもので、動悸（心悸）、心煩、心痛、息切れ（気短）、失眠多夢、嗜眠、譫語、健忘などである。

## 5. 心の病証

### 1) 心気虚証

**【病態】** 疾病が長引いたり、重症に陥って気を損耗する、老年になり臓気が衰弱する、あるいは先天の気の不足などの原因により心気の不足が生じ、心の生理機能の全面的な減退が起こる。心は血脈を主り、全身に血をめぐらせているが、心気が不足すると、心気の推动作用も十分に働かなくなる。そのため、血行は力を失い、血脈は充実できなくなる。神（精神思惟）も活発さを失う。  
**【症候】** 動悸（心悸）・息切れ（気短）、精神不振、眠たいが眠りが浅い、少し動くときと汗をかく（自汗）。これらの症状は疲労によって悪化する。顔色は白く艶がない。脈虚弱、舌質淡、苔白。

**【治法】** 補益心気

**【方劑】** 養心湯（『証治準繩』） 人參、黄耆、茯苓、茯神、当帰、川芎、遠志、酸棗仁、柏子仁、肉桂、五味子、半夏曲、炙甘草

心は血が潤沢でなければ機能失調しやすい。そのため心の虚証の場合、必ず心血も補益する。心気虚では益気養血と補心寧神で対処する。人參・黄耆が補心気で主薬。当帰・川芎で心血を補養する。茯苓・茯神・遠志・酸棗仁・柏子仁・五味子で寧心安神し、神の状態を安定させたり心律（脈拍）をコントロールする。肉桂で胸陽を疏通させ、半夏で和胃化痰する。

**【付方】** 帰脾湯（『濟生方』） 人參、黄耆、茯苓、白朮、当帰、竜眼肉、遠志、酸棗仁、木香、大棗、生姜、炙甘草

本来は心脾両虚証（脾気虚＋心血虚）に適応するが、益気補血・養心の効能にすぐれ心気虚証に応用できる。

人參・黄耆・白朮で補心気、当帰・竜眼肉で養心血、茯苓・遠志・酸棗仁で寧心安神。

### 2) 心陽虚証

**【病態】** 多くは心気虚から発展して、さらに重篤になった状態である。心気の推动作用ばかりでなく、温煦作用も衰退して寒象が加わる。血脈は運行無力となり瘀滞する。

**【症状】** 心気虚の症候に加えて、手足の厥冷、チアノーゼ、精神反応の遅鈍、嗜眠、浮腫などが現れる。顔色は蒼白、脈は遅で、ときには結滞や澁が現れる。舌質は淡で、紫色を帯びることがある。

**【治法】** 温補心陽

**【方剤】** 保元湯（『博愛心鑑』） 人參，黄耆，肉桂，生姜，炙甘草

補益心氣を基礎にして心陽を温補する必要がある。人參・黄耆で補心氣したうえ肉桂で通陽し，心陽を鼓舞する。

### 3) 心血虚証

**【病態】** 失血による血液の損失，脾虚による血液の化生不足，情志内傷による心血の消耗などによって起こる。全身の血の不足は心の機能に重大な影響を及ぼす。血の不足により血脈は空虚となり，血の全身への滋潤栄養作用が失調する。また，精神思惟活動も安寧を失う。

**【症状】** めまい・健忘，不眠・夢が多い，心悸不安。顔色は艶がなく，唇も赤味が薄い。脈は細弱，舌質淡。

**【治法】** 養血安神

**【方剤】** 四物湯（熟地黄，当帰，芍薬，川芎）加柏子仁・酸棗仁・茯神

養血の基本方剤の四物湯で心血を補い血脈を充実させ，養心安神の柏子仁・酸棗仁・茯神を配合して心神の安定を図る。

**【付方】** 人參養榮湯（『小兒藥証直訣』） 人參，黄耆，茯苓，白朮，当帰，熟地黄，芍薬，遠志，五味子，肉桂，陳皮，甘草

気血双補の十全大補湯から川芎を除き，遠志・五味子・陳皮を加えた配合で，十全大補湯の心気・心血を補益する働きに，遠志・五味子の安神作用と陳皮の理気作用を加え，心神の安定をはかる。

### 4) 心陰虚証

**【病態】** 肉体や精神の疲れ，疾病の長期化などにより，心陰を耗傷したり，心肝火旺などの内熱が心陰を灼耗して心陰が不足すると，陰陽の平衡が崩れ，陽氣を制御できなくなり，心陽が偏亢する。そのため，虚熱が生じる。また，精神状態は安静を失う。

**【症状】** 顔面紅潮（ことに頬），手足と胸のほてり（五心煩熱），胸苦しい，盗汗，不眠・夢が多い，口内炎や舌炎。脈細数，舌質紅（ことに舌尖が紅），少津。

**【治法】** 滋陰安神

**【方剤】** 天王補心丹（『撰生秘剖』） 地黄，麦門冬，天門冬，玄参，丹参，人參，当帰，五味子，柏子仁，酸棗仁，遠志，茯苓，桔梗

地黄が主薬で，滋陰降火し心陰を滋養するとともに虚火を鎮める。麦門冬・天門冬・玄参も心陰を補い，虚火を清泄し地黄の効能を補強する。丹参・当帰の養血安神と人參・茯苓の補気安神を配し，心の気血も補益して，五味子・柏子仁・酸棗仁・遠志で安神を補強している。

滋陰降火の効能を発揮するため諸薬の薬性が沈降に偏っている。桔梗を配するのは一味の昇提薬を配して昇降のバランスを調える意図で，この桔梗の役割は舟の楫（櫓や櫂）に喩えられる。元来は丹剂（丸薬）で朱砂（硫化水銀）をまぶして服用したが，現代では湯剂として用い，朱砂は除くことが一般的用法である。

**【付方】** 酸棗仁湯（『金匱要略』） 酸棗仁，知母，茯苓，川芎，甘草

養心安神・清熱除煩の効能があり、心陰虚証に應用できるが、虚火を鎮める、すなわち興奮を抑える働きは天王補心丹より緩和である。

主薬の酸棗仁は心の陰血を滋養する。肝気を疏調する川芎と、安神の茯苓、清熱除煩の知母を配している。

## 5) 心火亢盛証

**【病態】** 火邪が心に侵入したり、七情が鬱結して気鬱化火する、飲食物の偏りにより火邪が発するなどのメカニズムで心火が生ずる。

**【症状】** 心悸、不眠、煩悶、ときには狂躁・譫語、顔面紅潮、尿赤黄・大便乾。吐血・鼻出血、舌炎、皮膚の化膿巣が見られることがある。脈数有力、舌尖紅。

**【治法】** 清心瀉火

**【方劑】** 導赤散（『小兒藥証直訣』） 生地黄、木通、生甘草梢、竹葉

涼血降火の生地黄と、清心除煩の竹葉で、心熱を清泄する。木通と生甘草梢は清熱通淋・利小便により心熱を小腸（心と表裏）・膀胱經由で排除する。清心瀉火のほか利水通淋も兼ねる。

**【付方】** 黄連解毒湯（『外台秘要』） 黄連、黄芩、黄柏、山梔子

瀉心火にすぐれる黄連に黄芩を配すると瀉心湯類の中核配合となる。山梔子にも清心除煩の効があり、三焦の火を通瀉し導熱下降させる働きもある。黄柏は下焦の火を清泄する。合わせて清心瀉火解毒の効を発揮して心火を清泄する。黄連解毒湯を清心瀉火の目的で用いる場合、黄柏は必ずしも必要ではないが、導赤散の木通と生甘草梢と同様、清熱下泄に働くことも期待できる。

## 6) 心脈瘀阻証

**【病態】** 心気虚・心陽虚を背景として心の脈が閉塞した状態。瘀血や痰濁が内生する。

**【症状】** 心気虚または心陽虚の症候に加えて、胸痛（虚血性心疾患の痛みとほぼ一致）が現れる。

**【治法】** 活血通絡。必要に応じて散寒通陽や豁痰。

**【方劑】** 通竅活血湯（『医林改錯』） 赤芍、川芎、桃仁、紅花、麝香、葱白、大棗、黄酒

本来は腦竅を通竅し頭痛に用いる方劑だが、心竅の開通にも應用可能。通陽開竅の麝香・葱白と、活血化瘀通絡の赤芍・川芎・桃仁・紅花の配合で、活血通陽開竅する。黄酒は温陽通絡の補助。心脈瘀阻に用いるには、薤白・丹参を加えてもよい。

## 7) 痰迷心竅証

**【病態】** 体内に生じた痰濁が心竅を阻塞して、意識障害を起こしたもの。

**【症状】** 精神抑鬱・無表情、あるいは知能低下。意識レベルが低下して反応が鈍くなるか、または突然意識障害をきたし人事不省となる。口の中には痰涎がたまり、喉に痰鳴がする。舌の強ばり（構音障害）、半身不随などが見られ

ることがある。

**[治法]** 滌痰開竅

**[方剤]** 滌痰湯（『濟生方』） 半夏，胆南星，枳実，茯苓，橘紅，人參，石菖蒲，竹筴，甘草，大棗，生姜

燥湿化痰の半夏・竹筴に，化痰熄風の胆南星を配して，風痰を治める。石菖蒲は芳香開竅・滌痰化濁で清竅を開き，意識の混濁を回復させる。燥湿化痰理気の枳実・橘紅（陳皮）で化痰の力を強め，人參・甘草・大棗・生姜で益気健脾し，燥湿を補助している。

## 6. 心の病証に用いる薬物

表3に示す。上記の方剤の組成と照らし合わせて参考に供されよ。

表3 心の病証に用いる薬物

作用	薬物
清心	黄連 梔子 連翹 蓮子心 竹葉 犀角 玄参
開竅	麝香 蘇合香 冰片 石菖蒲 遠志 牛黄
鎮心	朱砂 竜齒 磁石 珍珠母 竜骨 牡蛎
安神	酸棗仁 柏子仁 合歡皮 遠志 夜交藤 茯神
活絡	丹参 川芎 桃仁 紅花 赤芍 田七 乳香 鬱金
補心気	人参 党参 黄耆 大棗 炙甘草
温心	桂枝 肉桂 附子 乾姜 薤白
補心血	当归 白芍 丹参 鶏血藤 竜眼肉
養心	熟地黄 麦門冬 五味子 百合 龜板

## 終わりに

本誌創刊号から連載した本講座はこれで終了を迎えた。連載第1回の「講座のねらい」に述べたように，本講座では気・血・津液・臓腑のさまざまな病証を説明し，それぞれの病証を治療するのに，どのような治法を立て，どのような方剤が適応するかを示し，その方剤の薬物の配合の意味を解説した。病証を理解するうえで必要な人体の生理機能の解説にも誌面を割いた。弁証論治を進めるうえで，基本的な証の把握と，それにもとづく治法の立案，治法を実現するための用薬と基本方剤の理解を身につける助けになっただろうか。本講座によって弁証論治の処方能力の基本を涵養する知識を提供できたならば，筆者の目的は達成できた。読者諸氏が弁証論治によって日本の医療に大いに貢献されることを期待して筆を措く。(完)



## プロフィール

平馬直樹（ひらま・なおき）

### ●現職

平馬医院院長，日本医科大学東洋医学科講師



### ●略歴

1978年 東京医科大学卒業

同 年 北里研究所附属東洋医学総合研究所医局 入局

1987年 中国中医研究院广安門医院 留学

1990年 牧田総合病院牧田中医クリニック診療部長

1996年 平馬医院副院長，後藤学園入新井クリニック漢方診

療部長を兼任

現在，平馬医院院長。2005年より日本医科大学東洋医学科講師

### ●著書

『図解よくわかる東洋医学』共著（池田書店・2005年）

『中医学の基礎』監修（東洋学術出版社・1995年）